

MITSU
K O

No. 4
佐佐木頼綱 (ささきよりつな)
53枚

〈登場人物〉

日本

●クーデンホフ・ハインリヒ伯爵

日本にオーストリア外交官として来日。オーストリアでは皇帝に最も近い家柄。

民族や国境を越えて平和な世界を作りあげたいと考えている。

●クーデンホフ（青山）・光子

ハインリヒ伯爵の妻。商人の娘。来日していたハインリヒ伯爵と恋に落ち結婚

●光子父

骨董商人。家長の言う事が絶対だと思っている光子の父。

●光子母

夫に従う従順な妻。光子の母。

●女中

●大道芸人

●材木屋、乾物屋、神官、巫女

オーストリア

●クーデンホフ・リヒャルト

ハインリヒと光子の長男。後に国の基礎となる思想を築きあげる。

●クーデンホフ・オルガ

ハインリヒと光子の長女。

●クーデンホフ・ハンス

ハインリヒ伯爵の弟。兄を慕っていたが、一族と国の未来の思想が兄と異なり

兄と衝突する

●クーデンホフ・マリエッタ

ハンスの妻。一族や自分の家、家族を守りたいと思っている。

●伯父（ハインリヒ伯爵の叔父）

●叔母（ハインリヒ伯爵の）

●ポトツキー伯爵、ナイブベルグ伯爵、フランツ大公（セリフのみ）

●家臣（皇帝の家臣）（セリフのみ）

●メイド、街人A、街人B（セリフのみ）

第一幕 日本との決別

舞台…正月の日本。神社前。大きな鳥居。賑わう人々、神主・巫女たちなど。

「第一場」正月・明けましておめでとう

神主・巫女

歌は心を 種として

よろずの言葉と なりにける

花に鳴く鳥 雨呼ぶ蛙 生けるもの

全てが歌を 歌ってる

鬼も神も 説き伏せて

男と女を 結びつけ

武士の心も 慰める

それが我らの 歌の心ぞ

(古今和歌集の序より)

①初詣客でにぎわう神社の境内。お囃子の音が鳴り響き、獅子舞や大道芸人が華を添える。人々はそれぞれに新年を祝っている。

大道芸人「寄つてらっしゃい。

見てらっしゃい。

皆で新年をお祝いしやしよう！

そろそろこのお嬢さん、獅子舞に噛まれて験を担ぎま

せんか？

さくあいらっしゃい！

お祝いしやしよう！」

▼町の人々&大道芸人ら

どんこんこん

祭囃子が

どんこんこん

神社の杜に

こだまする

しあわせを

噛み締めている

正月の町

賑やかな

お囃子の中

新しい

年が始まり

燃えている

どんこんこん

新しい

響きをみんなで

奏でよう

材木屋「おや乾物屋さん！あけましておめで

とう。今年もお世話になります。」

乾物屋「おお材木屋さん！あけましておめでとう。いつもご贖目に。」

①各々知り合いに新年の挨拶をしている。光子とハインリツヒ伯爵も初詣に来る

光子「あけましておめでとうございます、伯爵様。」

伯爵「あけまして？」

光子「ふふふ。お正月は“あけましておめ

でとう”と声を掛け合ってお互いの福

を祈るんです。日本（にほん）の新年はいかが
ですか？」

伯爵「なるほど、心より“あけましておめで
とう”お正月は厳かで美しいね。

特別な日を君と過ごせて幸せだよ。」

光子「私もです伯爵様。日本（にほん）では、お正月に
家族で神社にお祈りしにゆきます。

去年は私も父と母とこの神社に来まし

た…。（少し悲しげに）懐かしいわ。

あら、獅子舞が出ています！

行ってみましょう。」

①光子と伯爵は獅子舞を見に行く。

大道芸人「寄ってらっしゃい、見てらっしゃ

い！おやおや異人さんじゃないか！

獅子舞に噛まれていくかい？」

伯爵「Oh！これは獅子か！

そしてひよつとこ！

わはは、なんて豊かな表情だろう！」

①参拝客は大道芸人らを見て楽しんだり、知り合いに挨拶をしあったりしている。

光子「伯爵様、私は境内にゆきたいのですが

よろしいでしょうか？」

伯爵「行っておいで光子。僕はこの獅子舞を

もう少し見ていたい。」

光子「はい。私も初詣を終えた

らすぐに戻りますね。」

①光子は一人境内に参拝に行く。

「第二場」 光子の祈り

①境内では神主と巫女によって奉納の舞が行われている。

神主「祓へ給たまへ〜 清め給たまへ〜」

①神事を舞う神官と巫女。その横で、お参りをする光子。鈴を鳴らし手を合わせて祈りを捧げる。

光子「神様、私は親の許しも得ずに、異国人の伯爵と結婚しました。

そしてこれから、彼の故郷オーストリア・ハンガリー帝国へ向かおうとしています。

日本（にほん）に戻れないかもしれません。

父とも母とも会えなくなります。

伯爵様への愛が私の背中を押して止まないのです。」

①羽音を立てて鳩の群れが飛び立つ

光子「ああもつと自由に国を行き来できたらいいのに…。」

新年の

優しさに満つ

高原（たかはら）を

鳩の群れが飛んで行く

祭り囃子の向こう側

はしゃぐ子供の

賑やかな声

朝の陽に

そつと

椿が開く音

ひそやかな

思いがいくつも

芽生えている

うつくしいこの

国のかげら

私が別れを告げるものたち

① 神主と巫女達は祈りの舞が終わると彼らは境内の裏へと去って

く。

「第三場」 父の怒り

①物凄い剣幕で父が神社へ乱入。そのあとを母と女中が入ってくる。親に許しも得ずに異国人と結婚した事実を知り父は怒りに震えている。

光子母 「あなた、落ち着いて！」

きっと光子にも訳があるのです！」

光子父 「光子！なんて愚かな女だ！」

おお光子！

お前がなんと呼ばれているか

知っているのか！

洋妾^{めかけ}だぞ！

俺の胸はうなされて

太鼓の音が

轟渡る！

異人は皆いかさま師だぞ！

毎日毎日仏壇を

磨かせ育てた俺の娘が

異人の妾になるなんて！

俺の誇りに

泥を塗るのか！

混血の子が

旗を振るのだ。

妾の家と

まわりに知らせ

人目をはばかり

生きねばならん

恥じを抱えて

ゆかねばならぬ

おい光子！

お前が洋妾めかけになるなんて！

光子「お父様、

洋妾^{めかけ}なんかじゃ

ありません！

私は妻になるのです！

…いいえもうなりました…

そして私は、

オーストリアへいきたいのです」

光子母 「なんて事…！」

光子父 「愚かな！愚かな！愚かな！

俺の娘で

ありながら

お前は何も

分かっていない！

お前は俺の体面を、

そして日本（にほん）を

踏みにじるのだ！」

光子母 「光子お前は

オーストリアへ行くのかい？」

光子 「…お母様…ごめんなさい…」

①母は泣き崩れ、女中は母を支える。

女中「奥様！お気をしつかり。」

光子「お父様、私はあなたも故郷も

愛しています。

でも…

伯爵様も愛しているの…。

ご理解ください…」

光子父「俺に口答えをするな！」

光子母「やめて！あなた！」

光子父「女は男に

従順である

べきなんだ！

お前の野蛮な心など、

この短刀で

断ち切るがいい！」

①父が取り出した短刀に母がしがみつく。

光子母「やめて！」

女中「旦那様！」

光子父「誇りを欠片も分かっていない

おまえは「娘」

ではない！穢（けがれ）だ！」

①父に刀を押し付けられ、光子は座り込む。

光子「ああ穢（けがれ）と呼ぶなんて…

私ははじめて

恋愛をしたのです。

それは野花が

芽生えるような

出来事でした。

魔法にかかった時間でした。

これは恋愛

穢じゃないわ。

でもこれは

お父様の穢（けがれ）になるのね。」

①光子は目をつぶりゆっくりと息をついた。喉に静かに刀をあてがう。

「第四場」 日本からの旅立ち

光子母 「光子！……ああ、だめよ！……」

①母は慌てて光子から刀を奪いとる。

光子父 「お前まで！なんて馬鹿なんだ！

二人共、二度と我が家の敷居をまた

ぐことは許さん！」

①父は怒りに震えながら去っていく。（退場）

光子「お母さま…」

光子母「大切なわたしの娘。恐ろしい思いを

させてごめんなさい。

あなたの背を押す「恋」というものを私は知らないけれど。

あなたが大事にする何かがあること信じるわ。

お行きなさい、オーストリアへ。

…抱きしめられるのはこれが最後ね…

幾千の

山の向こうへ

あなたは行くのね

靡（なび）け 山よ

靡（なび）き去れ 森よ

愛しい我が子の

顔を見るため

母の思いを阻むことは許さぬ

靡（なび）け 海よ

靡（なび）き去れ 川よ

母が我が子を

見守るために

女の思いを留めることなど出来はせぬ

（柿本人麻呂 「石見相聞歌」）

「どんなに離れていても、あなたは私の

娘よ。辛い時は「靡け」と唱えなさい。

山も海も阻むことのできない、母の力を

あなたに送るわ。

最後に笑って見せて。

ああ大切な我が娘。」

光子「お母様・・・

ありがとうございます。

産んでくれて、育ててくれて、

そして受け入れてくれた。

ありがとうございます、おかあさん。

光子母

温かい

娘の言葉と抱擁が

ゆっくりと

美しい記憶になってゆく

静かに眺めよう

朝の空をゆく雲を

鳥たちの

羽ばたきを

促せる風を

第二幕

「第一場」お披露目・歓迎されない花嫁

舞台…オーストリア。歴史ある城の大広間、リビング、バルコニー

①ハインリヒ伯爵夫妻の帰国と結婚を祝うパーティーに貴族や親戚らが集い賑やかにお酒を楽しんでいる。そこにハインリヒ伯爵が一人大広間へ入ってくる。友人たちが彼に声をかけてゆく。

ポトツキー「ハインリヒ伯爵、ご帰国ご結婚

おめでとう！

旅の話聞かせておくれよ」

伯爵 「やあポトツキ！そうだな、狩りの話はどうだい？ 朝鮮

では虎を、南米ではチーターを射止めたぞ！」

ポトツキー「ははは！

銃の腕は相変わらずだな！」

ナイブベルグ「やっと戻ったなハインリヒ！」

「もう肉団子は食べたか？」

フランツ 「おかえり伯爵！ちよつと痩せたんじゃないか？

久々に君の歌が聴きたいよ」

伯爵

「おおフランス大公！光栄で

す！では乾杯の歌を！」

▼伯爵

オーストリアで生まれた俺は

世界をまわり帰ってきたぞ

心はいつでも故郷（ふるさと）に

ここは主君も国もよろしい

▼伯爵＋貴族

乾杯 乾杯

手には杯（さかずき） あふれんばかり

乾杯 乾杯

胸には友情 呑み明かそうぞ

飲むぞ 友よ

友情の乾杯

笑おう 友よ

尊敬の乾杯

歌うぞ 友よ

歡喜の乾杯

踊ろう 友よ

愛情の乾杯

乾杯 乾杯

飲んで 歌おう

体も心も

ワルツにのせて

①各々に貴族達は伯爵に結婚祝いの言葉をかけていく。そこに光子が大広間に入ってくる。光子に微笑みかける人もいれば冷たい視線を送る者もいる。

伯爵 「さあ光子、こっちへいらっしやい。

愛する私の家族を紹介しよう」

ハンス 「はじめまして、弟のハンスです。そ

して妻のマリエッタです。」

マリエッタ

「どうもはじめまして。東洋人とお会いするのは初めてですわ。

東洋の方もドレスを着るのですね。てっきり着物という布を巻いているのかと。」

光子「はじめまして herr ハンス、 frau

マリエッタ。日本から来た光子と申します。私はもうオーストリア人ですので今日はドレスを着ました。」

伯爵「マリエッタにも着物を見せた

かったよ。なんとも美しい服なんだ。」

マリエッタ

「お義兄様は服に無頓着だから。光子さんが着てらっしゃるドレスも時代遅れのものだわ。」

伯爵「ははは！マリエッタは相変わらず流行にうるさいな！服のことも光子に教えてやってくれ。」

①光子は伯爵に連れられて家族や親戚との挨拶を続ける。

伯爵「さあ光子よおいで。挨拶に疲れただろう。少し踊って楽しく過ごそう。」

光子「でもこんな大広間で踊るだなんて…」

恥ずかしいわ。」

伯爵 「ははは！気にすることはない。はやく

おいで！堂々とすればいいのさ。

君は美しいよ！」

伯爵 「Allies waltzer！（さあワルツを踊ろう）

①光子は伯爵に引かれシャンデリアの煌めきの下で踊り始める。

▼光子

ここがボヘミア

貴族の館

眩いばかりの装飾と

高い天井

踊る人々の肌に

触れては光るシャンデリアの灯

ああどこまでも隙間なく

装飾された美しい部屋

①周囲の貴族の反応は様々。にこやかな者もいれば、好奇の視線や冷たい視線を送る者、嘲笑う者もいる。

▼親戚一同

誉れある我が一族に

混ざりこむ

一滴の移民の血

▼マリエッタ

移民の女のドレスが揺れる

時代遅れのドレスに

くすんだ肌

家宝の宝石を飾り

なんて醜い女でしょうか

①周りで親族や貴族たちから光子への蔑み・嘲笑い・嫉妬が渦巻く。ダンスの周りの合唱が悪意に満ちた不協和音となる。

▼ 貴族達

この国の

うつくしいワルツを乱す

移民の女の

途切れ途切れのワルツ

不協和音を

追い出せ 追い出せ

蛮族は

伝統を知らぬ

移民らは

肌に不吉の影を持つ

巢食う奴等を

追い出せ 追い出せ

▼ 光子

見えてくる

冷たい視線

冷たい笑い

見下されている

私の髪、肌

①凜として

靡（なび）けワルツよ、

靡（なび）け、靡（なび）け

美しい貴族の皆様

日本の美を見せましょう。

削いで、削いで、

なめらかに。

私達は削ぐのです

一番ムダの少ない動き

一番腕の綺麗な角度

もっと日本の美を見せましょう。

私達は心を磨くの

水平線みたいな真っ直ぐな心

視線にかえてあなたに注ぐわ

①光子のしなやかな所作や歌に貴族たちが気付き始める。拍手を送

る貴族もいる。伯爵の妻としてではなく一人の人間として改めて歓迎を受ける光子。

「第二場」悪の誘惑

① ハンスとマリエッタは大広間からバルコニーに移動し二人だけになる。

ハンス 兄貴に一目置く諸侯たち

どいつもこいつも分かっている

兄貴は移民を連れてきたんだ！

兄貴のしなやかな指は

静かに俺の胸に分け入って

ずたずたに俺を引き裂いてしまう

マリエッタ 「みしみしと

あなたの息に

真っ黒な

怒りが根を張る音がする

ハインリッヒは何も知らない

代々守ってきたものを。

弟の苦しみさえも。

女の趣味が悪いハインリッヒと

移民の血は危ないわ

オーストリアの

狂わせてしまうわ」

マリエッタ 「あなた、あんな東洋女にクーデ

ンホフ家の城を明け渡そうなん

て思っていないわよね？」

ハンス 「どういう事だ？」

マリエッタ 「この国を何も知らない女がこの家の家長の嫁になるな

んておかしな話だわ。日本ですら平民だった女よ。ク

ーデンホーフ家に乗っ取らせないためにも、あなたは

カール大公の様に勇敢に戦うべきよ。

お兄様を撃って一族の名誉を奪い返すのよ。」

① マリエッタは静かに拳銃をハンスに渡し去っていく。ハンスの目には義務とも野望とも分からぬ光が灯る。

ハンス 「この俺が兄さんを…」

―暗転―

「第三場」 兄弟の確執

① 一人作業をしているハインリヒ伯爵。光子がお茶を持ってくる。

光子 「少しお休みになられたら」

① 光子が伯爵へお茶を渡す。

伯爵 「ありがとう光子」

光子 「いつも遅くまで何を勉強なさっているの？」

伯爵 「今は本の原稿を書いていたよ。」

ブツダ、マホメット、そして日本の神道、

旅した国の素晴らしい文化を本にしたいんだ。

①そこへハンスが入ってくる。

伯爵 「ハンス。どうした？顔色が悪いな。」

ハンス 「兄さんどうか

考えてほしい事があるんだ。」

伯爵 「改まってなんだい」

ハンス「クーデンホフ家の継承を辞退してもらえませんか、兄さん。」

伯爵 「突然どういう事だ？」

ハンス 「先祖代々受け継いできた

目の色、

髪の色、

肌の色、

そして精神。

クーデンホフの伝統を

僕は守りたいのです。

兄さんは血を汚しました。」

伯爵 「血や国籍の境目なんて

幻想だよハンス。」

ハンス 「でも東洋人はふさわしくない。」

伯爵 「東洋も西洋もない。」

昔よく話したじゃないか

国境と人種の境に苦しんで

争う歴史を変えたいんだ」

ハンス 「なつかしいね。」

けどもう聞き飽きたよ。

兄さんの理想論

僕たちはもう子供じゃないんだ。

戦争で流れた血とか悲しみ。

しかたないさ

国を動かすには

非情でなくてはならない

ネズミを駆除するのと同じさ

クーデンホフ家から移民は追い出さ

なければならぬ」

伯爵 「何を言い出すんだハンス！」

ハンス 「僕の言葉は届かないようだね。」

①ハンスは拳銃を二丁取り出す。一丁は伯爵に渡し、もう一丁は自分で伯爵に向ける

ハンス 「兄さん、決闘を申し込むよ」

伯爵 「気は確かか！」

光子 「なんて事！」

ハンス 「僕は兄さんに躊躇なく引き金が引けるよ。」

クーデンホフ家の未来の為ならぬ」

光子 「やめてくださいハンス！」

移民の血が問題なのであれば

私を撃ってくださいればいい！」

①両手を広げて伯爵の前に立つ光子。

ハンス 「ははは、見てよ兄さん！」

クーデンホフ家の男が移民の女と決闘するのか!?

こういうバカげた話になるから移民は嫌なんだ」

①光子に銃を向けるハンス

ハンス 「僕の信念を証明するよ、兄さん」

伯爵 「ハンス!やめろ!!」

①伯爵は慌てて銃を抜きハンスの銃を撃ち落とす。屋敷に響きわたる銃声を聞いて慌てて女中や執事達が入ってくる。

メイド 「何事ですか！」

ご主人様、大丈夫ですか!」

伯爵 「大丈夫だ。ハンスが興奮してしまっただけ。ハンス!自分が何をしたか分かっているのか!!」

「正気に戻るまではこの屋敷に足を踏み入れてはならない」

① ハンスは気遣うメイド達の手を振り払い、自ら屋敷を去っていく。
去り際に言い捨てるように。

ハンス 「祖先の怒りが兄さんに落ちるだろう！」

|| 暗転 ||

「第四場」 十年後 / 家族の誓い

① 長男リヒャルトと長女オルガとメイドが心配そうに語っている

リヒャルト 「父さんが心配だ。食事もほとんどしていない。」

メイド 「今朝もスープを一口召し上がった

だけです。お体が心配です。」

リヒャルト 「よくなるといいんですけど・・・」

▼リヒャルト

パパは屋敷で一番早起き

パパが明るい声で笑うとみんながつられて笑い出す

パパはいちばん最後まで起きていて
いつも勉強をしていた

▼オルガ

パパはネクタイを締めるのが下手
パパのネクタイを締めるのは
いつも私の仕事

▼リヒャルト&オルガ

僕あぐらをかいて座るパパ
パパの膝が大好きだった
皆でよく歌った
虫を愛した王様の歌
元気で大きく、明るくて
星の光を湛える
パパの歌

① 衰えた伯爵が光子に支えられ入ってくる。

オルガ 「パパ!!」

リヒャルト「パパ、大丈夫かい？」

伯爵 「大丈夫だよ。愛しい我が子達。お

前たちの顔を見るのが一番の薬だ。」

光子 「あなた：」

①伯爵がふらつき、リヒャルトが支え、長椅子に横たわらせる。長椅子に横たわった伯爵を皆で囲み、身体の具合を案じる。

リヒャルト「無理しないでパパ。」

光子「あなたせめて一口、飲み物でも飲まれたら？」

伯爵「ありがとう。ああ：： 久々に君のグリーンティーが飲みたい

な」

光子「かしこまりました。今お茶を用意してくるわね」

①光子は部屋から出ていく。

伯爵 「子どもたちよ聴いておくれ

秋の光よ

暖炉の炎よ

お前たちも聴くが良い

僕のはかないささやきを

僕がどれだけ幸せだったか

お前たちは知らないだろう

君たちを膝にのせて歌う時

僕は完全な幸せだった

僕に天国はない

なぜならもうここにあるからね

心から愛していた

そして、忘れないで

世界のみんながこうやって

誰かを愛し

子を慈しみ

歌を歌って

生きていること

笑顔に違いなどなかったよ

苦しむ人に手を差し伸べるんだよ

僕がママを愛したように

君たちが生まれたように

僕の言葉を受け継いで

皆で分かち合ってほしい

▼リヒャルト&オルガ

ひとつひとつが

輝いているパパの言葉

忘れないよ

忘れないよ

広い世界の話

色んな人の物語

僕らの心や体を作った。

夏の風よりずっと熱い

パパの優しい言葉たち

伯爵 「もうこんな時間だ、お前たちもそろそろ寝なさい。」

リヒャルト&オルガ 「パパ…」

伯爵 「今夜は星空がきれいだよ。素敵な星空の下で良い夢を見なさい。」

リヒャルト 「おやすみパパ」

オルガ 「おやすみ、愛してるわパパ」

伯爵 「愛しい子達よ。パパも愛しているよ。」

①子供たちは部屋から出ていく。

「第五場」ハインリヒ伯爵の無念

①最後の力を振り絞るように机に向かう。伯爵は書き始める。

▼伯爵

頬へ伝わる風が

昨日より冷たい

もう残り少ない時間

もう色を映し出さない瞳

死の絡み合う灰色の世界に

私はひとり愛を語るよ

夜よ聴いておくれ

星々よお前も聞くが良い

私は君の地平へゆくよ

一人になるのは寂しいけれど

星となり愛するものを照らそう

星影となり悲しむものを抱きしめよう

星光（ほしあかり）となり静かに手を重ねよう

①そしてベルを鳴らしメイドを呼ぶ。咳き込みながらメイドに手紙を渡す。メイドが去るとぐったりと座る。

伯爵は息が絶える。そこへ光子がお茶をもって入ってくる。

光子「あなたお茶を入れましたよ。」

①伯爵の様子が変なのに気づく

光子「あなた！あなた！

誰かお医者様を！早く！」

①メイドが入ってきて慌てて部屋を出ていく。

メイド「（舞台裏で）旦那様が、旦那様が！早く医者を！」

①子供たちも入ってくる。伯爵に近寄り

リヒャルト&オルガ「パパ！パパ！」と泣き崩れる。

|| 暗転 ||

第三幕 ウイーン・光子の決意

舞台…ウィーン・街角・宮殿前

「第一場」失意・正統相続者はだれ？

①喪服の光子と簡素な装いの子供が登場。

▼リヒャルト、オルガ

細くなっていたパパの足、

細くなったパパの腕、

あっけなく崩して

今朝がやってきたんだ

パパに抱きしめられたかった

今朝がやってきたんだ

リヒャルト「ママ、これからどうするの？

ハンスおじさん達がああ屋敷を奪おうとしている。

お葬式の時だって…」

オルガ 「皆あんまりだわ！パパが亡くなったというのに、

継承権と移民を追い出す話ばかりして…」

光子 「リヒャルト、オルガ、大丈夫よ。

お母さんが皆を守るからね。

あなたたちにはクーデンホフ家を継ぐにふさわしい教育を受けさせます。目や髪の色で差別を受けないためにね。」

街人A 「光子さん聞きました！伯爵様が亡くなられたと。」

街人B 「町の皆（みんな）がとても悲しんでおります。

光子さんもお気をしっかりと」

光子 「ありがとう。」

①光子、子供たちにむけて

光子 「ここウィーンにはパパを慕っていた人が沢山いるの。

皆、あなたたちを助けてくれるわ。」

②弟夫婦と親族が追いかけてくる。

ハンス 「光子さん、継承権の話は終わっていない！」

マリエッタ 「この町に逃げたってもうあなたたちは無力よ」

伯父 「移民は追い出さねばならん！」

東洋人が我が一族の長になるなんてもつての他だ！」

叔母 「この際よ、移民は全部追い出すべきなんだわ！」

ハンス 「兄さんは騙せても私達は騙されないぞ！」

▼ハンス、マリエッタ、叔父、叔母

大切にしていたものを

奪われた

心の怒りを知らないらしい！

思い出の場所を奪われ

傷ついた

心の痛みがわからぬらしい！

我々は争うのだ

誇りのために。

踏みにじられた

誇りのために。

マリエッタ 「継承権をよこさない！

この東洋のネズミが」

光子 「皆様、お聞きください

私はクーデンホフ光子。

夫の血と心を継いだこの子らの

未来を母として守ります。

いいえ、それだけではないわ。

垣根を越えて人を愛した

夫の思想を守ってみせるわ。」

ハンス 「この国に移民の未来はない！」

光子 「立ちはだかる者に向かって

私は歌う。

「靡け」と。

伯爵から教わったの。

守るべきものを。

だから迷いなく進めるわ。

靡け！弱き人の心

靡け！わたしの不安や恐れ」

マリエッタ 「移民なんて見たくないのよ！」

光子 「マリエッタ、あなたには着物を見せるわ。」

ドレスと違う 美しさにきつと心を奪われるわ」

ハンス 「面倒な事などするな！」

光子 「ハンス、あなたにはブツダの思想を教えてあげる。」

あなたの辛さを救ってくれるわ。」

ハンス+マリエッタ

「黙れ！黙れ！黙れ！」

「第2場」 光子の決意

①そこへ王族の家臣が皇帝の親書を光子に運んでくる。

家臣 「クーデンホフ光子さんですか？」

光子 「はい」

家臣 「皇帝陛下よりクーデンホフハインリヒ伯爵の遺言書を

預かってきました。」

ハンス 「皇帝陛下からだ！」

光子 「遺言書を？」

家臣 「はい。お亡くなりになる直前にご主人様は皇帝に託されたのです。」

もしよろしければご家族もおられますし、読み上げさせていただきます。」

光子 「お願いいたします。」

家臣 「クーデンホフハインリヒの名のもとに、クーデンホーフ家の継承権は妻光子に、屋敷、そしてそれらの領土は光子とリヒヤルト、オルガに。弟ハンスはハインリヒ家より除名する」

①大きな声で読み上げていると街の人々がだんだんと集まってくる。

ハンス 「なんて事だ！」

マリエッタ 「そんなもの効力なんてないわ！継承権は正統なる血をひくハンスよ！」

家臣 「これを皇帝フランツ・ヨーゼフ・カール・フォン・ハプスブルク||ロートリンゲンが保証する」

光子 「皇帝が！」

家臣 「正統なる継承者は光子さん、あなたです。子供たちと共に彼の遺志を継ぎこの国によき未来を築いてください。」

①光子は子供たちを涙ながらに抱きしめる。親族たちは絶望にくれる。

マリエッタ 「私達の思い出の家が、

移民の家族に奪われてしまうなんて！」

ハンス 「この国の未来はどうなるんだ…

奪われてしまうぞ、オーストリアが…」

伯父・叔母 「広大な土地が手に入るはずだったのに！

手にしたのは広い広い絶望だ」

ハンス 「俺の夢も崩れ落ちた。

俺は間違っていたのか。

俺は野心に駆られたのだろうか。

純粹に国を、家族を守りたかつ

た筈なのに」

家臣 「それとこれはハインリヒ伯爵からの手紙です。」

①家臣は手紙を光子に渡す。

光子 「愛する光子へ

君のおかげで私は可愛い子供たちに恵まれた。

僕は幸せな人生だったよ。

もっと君たちと一緒に歌いたかったけれど、

これからは星となって君達を見ているよ。

だからこれからも私に微笑みを見せておくれ。

どうか幸せに。

パパより」

①涙する光子、涙する子供達、沸き立つ街の人々。退く親族達。

▼光子

あなたの愛に再びふれた

あなたは再び与えてくれた

ありがとう

ありがとう

思ってくれたこと

あなたは まだここにいるのね

ゆっくりゆっくり

とてもゆっくり

手の届かないどこかへゆくのね

▼光子、リヒャルト、オルガ

まぶたを閉じると暗闇に

まだ笑ってるパパが居る

頬を伝う一滴の

熱い部分にまだパパが居る

胸を渦巻く

熱い風にまだパパが居る

▼民衆

崇高な意思が受け継がれようとしている

ボヘミア ボヘミア

皆の国だ ボヘミア

光子「ハンス、マリエッタ、叔父様、伯母様、

どうかお立ちください。

この国が私を快く迎え入れてくれたように、クーデンホフ家の者として私はあなた達を受け入れます。

どうか私と子ども達に受け継ぐべきオーストリアの誇りを教えてください。

①光子はハンスらに手を差し出す。

ハンス「光子さん…」

兄さんの居ない静かな朝の木漏れ日に

兄さんの意思が激しく燃えるのが見える

夏の日差しのように眩しい

兄さんの意思

▼民衆

ささやかな

この誕生に

我らは喜びの歌を捧げよう

ボヘミア ボヘミア

大切なものを

受け継ぐことと

分かち合うこと

ボヘミア ボヘミア

繰り返えそうよ

喜びの歌

このささやかな誕生に

新しい時代が殻を割ろうとしている